

Café des open

三浦一族

Menu 第19回

三浦一族ゆかりの 遺跡と文化財②

文／磯口健太郎（横須賀市教育委員会 生涯学習課）

あけましておめでとうございます。前回の「Café des 三浦一族」では、かつて「円通寺」と「深谷やぐら群」にあった文化財を中心に紹介しましたが、今回はこれらの遺跡の現在の様子について、令和4年12月の調査をもとに紹介します。

深谷の谷底の平坦部を奥まで進むと、高さ10㍍ほどの段を登ります。段を登ると近世地誌に描かれた円通寺跡と想定される、東西南北25㍍を測る平坦部が広がっています。この円通寺跡の西には小さいな

ながらも水量のある沢が流れ、北の谷奥へ進むと左右の斜面に広がるやぐら群を見上げることができます。お堂とその背後の斜面にやぐら群が展開する景観は、中世鎌倉寺院の典型であり、三浦一族と鎌倉との間に密接な交流があったことを物語っています。

円通寺跡を東側へ進むとやぐら群の最下部です。3㍍のやぐらが並び、その前方には約15㍍四方の平坦部があります。

他のやぐら群の例に倣えば、この平坦部には荼毘所（火葬場）が想定され、今後の調査がまたれます。

そこから西へ進むと馬蹄形の山に囲まれた、やぐら群の中心部に至ります。南を向くと足下に円通寺跡の平場が広がり、視線を上げていくと深谷の谷、更に先に大矢部の街を望みます。北へ振り返ると、東西の斜面にやぐら群が展開しています。特に西側斜面に展開するやぐらは4段で構成され、最上部と最下部の標高差は10㍍以上に及び、少なくとも8㍍を確認しました。中には昭和14年時の故・赤星直忠

氏の記録にはない、今回初めて記録されたやぐらもあります。昭和14年には埋まっていたのか理由は定かではありませんが、石塔類が清雲寺に改葬されることなく、そのまま残されているやぐらもありました。なお、この4段やぐら周辺は谷筋にあたるため土砂の堆積が著しく、未知のやぐらが埋没している可能性があります。

馬蹄形の山の最奥部にあるのが1号穴です。1号穴は他のやぐらから10㍍以上登った所に造られています。



深谷やぐら群 4段やぐら全景

1号穴へ至る通路は4㍍もの幅を測り、そこにはかつて清雲寺の文永八年銘板碑が建てられていました。内部は天井を家形に整形し、妻入りの前室と平入りの後室の二室構造で、それぞれ神社の拝殿と本殿を思わせます。赤星氏の報告によれば後室に三浦氏初代為通と三代義継の五輪塔があり、床には板石が敷かれていたとあります。壁と天井には漆喰が塗られるなど非常に

丁寧な造りですが、納骨のための施設は見られません。後世に改変されている可能性も考えられますが、規模も大きく特異な構造を持ち、立地も他のやぐらと隔絶するなど、1号穴は他に類例の無い謎の多い遺構です。

円通寺跡と深谷やぐら群について広く知らされるのは、昭和14年の調査を赤星氏が報告して以来、実に80年ぶりのことです。三浦一族に関する膨大な情報が今も眠るこれらの遺跡は、これから私達にどのような物語を教えてくれるのでしょうか。